

## プラトニーの美學 (承前)

深 田 康 算

### 十一

「フェドロス」に説かれてゐる身體美は、上述の如くに、其が擔つてゐると吾々の解釋した第一と第二との役目の上から見れば、實に吾々に對してプラトニーの美學の核心を形成する所の思想を十分に開示するものである。美の中心的代表的現象が身體美(若しくは人間)であること、美の根本的規定が「美のイデア」への分與に依りて與へられること、さうして「美のイデア」の特殊性が其可視性若しくは具象性に在ることは、其所に十分明瞭に説かれてゐると見ることが出来る。プラトニーの此思想が美を正當に規定せしめ得る原理を捕へたものであると云ふことは、併しながら、唯二つの條件の下に於てのみ始めて云ひ得ることである。即ち第一には、彼の云ふ所の身體美が、所謂精神からして引離された所の所謂形體の美を意味するのでなくして、人間の姿と

しての身體美を意味すること、第二には「美のイデア」の特殊性としての可視性が「美のイデア」其ものゝ特殊性であることを嚴密に意味すること、此二つの意味が確實に保持されると云ふ條件の下に於てのみプラトンは此思想に於て美を正當に規定し得たと云はるべきである。何故ならば、身體美が總ての美の諸種類に對して中心的若しくは代表的意義を持ち得るためには、其は單なる形體の美を意味するものではない、得ない、人間の總ての活動の可視的なる姿として若しくは人間其もの（の表現として始めて身體美はあらゆる美に對しての中心的代表的地位を占め得る。又「美のイデア」に依りて美が規定され得るためには「美のイデア」に特殊性が確認せられなければならぬ。特殊性を缺くイデアに依りての規定は云ふ迄もなく何等の規定を與へるものでない。「フエドン」一〇〇Cに於ける規定等が其儘では抽象的なるものであり、畢竟一種の同語反覆に過ぎないのはそのためである。さうして「美のイデア」の特殊性が其可視性に在ると規定せられた以上は、此の意味に於ける可視性は假令イデアの概念と矛盾するが如きものであるにもせよ、又總ての他のイデアに對しては否定せられなければならぬ如きものであるにもせよ、「美のイデア」には其が飽くまでも確保せられなければならぬであらう。〔此事は、可視性が總てのイデアの有する

屬性とせらるゝ場合に於ても同様に主張され得る。例へば善のイデアが見られると云ふ意味に於て可視性が總てのイデアに附與せられる場合に於ても、美のイデアの特殊性たる意味に於ける可視性は確保せられなければならぬ。而してプラトンは、フェドロスに於て、上述から吾々の知り得た如くに、一面に於ては二つの條件の確保の下に美を規定してゐるのである。

然るに他の一面に於ては「フェドロス」に於て已に身體美は精神美と對立に於て立つものとも考へられて居り、かくして精神美のみが説かれてゐる所の「シムポシオン」への移り行きを可能ならしめて居る。蓋し「フェドロス」の終り(二七九B)に於てパン及び其他イリッソス川の邊に宿れる總ての神々に向つてソクラテスが捧げてゐる祈禱の中に見ゆる『内的』εὐδοκίαν と『外的』εὐχαρίαν との美は、恰も「シムポシオン」(一一〇B)に於ける『精神に於ける美』εὐταὶς ψυχικαὶς καλὸς と『身體に於ける美』εὐ τῷ σώματι καλὸς との對立に相應するものであり、前者に於てソクラテスが神々に依り『内的美』が彼の心に恵み與へられ、外的美に一致せんことを祈つてゐるのは、即ち後者に於てデオチマが彼に教へてゐる如く『精神に於ける美』は『身體に於ける美』よりもより價値あるもの τιμιώτερον であるが故である。——フェドロスに於ける身體美の概念がプラ

ト一の美學に於て第三の役目として精神美の導入を課せられてゐると考へた吾々の理由は此所に在る。而して此精神美の導入、身體美に對する其の對立若しくは優越は「シムボシオン」に於て論せられてゐる所から見れば、遂に「フエドロス」に於て高調せられてゐる身體美の意義と矛盾する所のもの、若しくは其を否定する所のものではないか。それは畢竟吾々が上にプラトニーに依りて確守せられなければならぬ條件として擧げたもの、第一を破棄するものではないか。是等の問題が此所からして吾々の前に展開される。

加之「フエドロス」に於ける身體美の規定には前に指摘して置いたやうに（前掲九參照）二つの相異なる見方が相混じて含まれてゐる。「美のイデア」に依りての身體美の規定には、一方に於ては、美なるものゝ意義を「美のイデア」の回憶に在るとする見方が含まれてゐると共に、他方に於ては、美なるものゝ意義をイデアの回憶に向はしめる手段たることに在るとする見方が含まれて居る。一方から見れば、身體美は美のイデアの回憶である。其は現象界に捕はれてゐる吾々をして實在界のイデアを回憶せしめるための手段であると云ふよりは、寧ろ實在界のイデアの一つなる美のイデアの現象界に於ける自己啓示であり、自己顯現である。他方から見れば、身體美が美の

アイデアの回憶であることは、アイデアの回憶であることを意味する。身體美は實在界のアイデアの一なる美のアイデアの回憶に止まらずして、美のアイデアを通じてアイデア總ての回憶に吾々を導くものであり、先づ美のアイデアを、而して次に總てアイデアの世界を回憶せしめるための手段たる指標である、映像である。此二つの見方は、『プロドロス』二四九D—二五〇Dに於ける論述の中に殆んど別つ可らざる融合に於て混在してゐる。然るに此二つの見方の孰れかを取る事に依りて、若しくは此孰れかに重きを置く事に依りて、『美のアイデア』の特殊性としての其可視性に就ての規定は、或は支持され得るのであり、或は放棄せられなければならぬのである。身體美は其自ら已に美のアイデアの回憶であること、美のアイデアの自己顯現であることに力點が置かれるならば、美のアイデアは、其が身體美に於て『吾々の感官の最も清明なる戸口を通じて最も明らかに輝く』ことに依り、『最も見られ得べきもの』たるが故に、其可視性を自己の特殊性として確保し得るであらう。之れに反して、身體美は單に美のアイデアの回憶への指標であり、アイデア一般の回憶への手段であることに力點が置かれるであらうならば、美のアイデアは、已にアイデアとして、其自らさへ身體美に於て可視的となり得るものではなくならなければならぬ。美のアイデアの特殊性として規定された其可視性は、

さうであるからして、身體美が其自ら美のイデアの回憶であると見做されるか、若しくは、イデアの回憶への手段であると見做されるかに従つて、確保せられるか、若しくは放棄せられるかでなければならぬ。身體美が其自ら美なるものとして、若しくは唯一つの美として高調せられてゐる側から見れば、「フェドロス」に於ては「美のイデア」の特殊性として其の可視性が嚴密に確立せられてゐると云ふべきであらう。然るに身體美が精神美に對立するものであり、其への手段であると見做されてゐるのみならず、精神美が善として美としての身體美を規定するものであるとさへ見做されてゐるやうに解釋され得る所の「シムポシオン」に於ては、可視的なる身體美は不可視的なる精神美に依り、可視的なる美は不可視的なる善に依りて規定せられて居ることも見られる。總て可視的なるものは不可視的なるものに依りてはじめて存在と意義とを有する。彼は是の影として其自らとしては存在せざるもの、意義を有せざるものである。彼は映像であり虚偽であり非實在であつて、是のみが實體であり眞理であり實在であるとせられてゐる。可視性はそれ故にイデアの持ち得る屬性でなく、従つて美のイデアがイデアとして持ち得る屬性でない。其は單に現象界の屬性たるに過ぎぬのである。斯くして「シムポシオン」に於ては、美のイデアに可視性なる

特殊性が認められて居らないばかりではなく、美のイデア「其ものも亦イデア一般の中に其姿を隠すのである。——其點から云へば、シムボシオン」の所説は「美のイデア」を見得るものは稀であると云ひ、音や色や形やの美を愛する者は「美のイデア」を見ず、又是等のものから作り成されたる作品を愛する所の者も「美其自を見ぬ」と云つてゐる所の「國家論」四七六BCの所論と一致して居る。——さうして斯の如き「シムボシオン」の立場から翻つて見れば「フエドロス」は唯に「シムボシオン」に對して矛盾して居ると指摘されるべきのみではなく、已に「フエドロス」一篇の中に自家撞着の潜んで居ることが指摘され得べきであらう。——此所からして吾々の前に展開される問題は、「美のイデア」の特殊性として「フエドロス」に於て規定せられてゐる可視性が果して嚴密にプラトニー依りて美のイデアの特殊性として最後まで確保せられ得たであらうか。身體美に對して精神美の優位を力説する「シムボシオン」は身體美を高調する「フエドロス」と矛盾するものなのではないか。「フエドロス」一篇の中に於てさへも、已に其所に「內的美」が言及せられてゐること、及び美のイデアに依れる身體美の規定の中に二様の見方が混在せることは、美の特殊性が已に其所でさへも見失はれやうとしてゐることの明らかなる證據ではないか。——約言すれば、上に吾々がプラトニーに依りて確守せられ

なければならぬ條件として挙げたもの、第二は「フェドロス」から「シムポシオン」への移行行きに於て、加之已に「フェドロス」一篇の中に於て破棄せられてゐるのではないかと云ふ重要な點である。

上述の如くであるからして「シムポシオン」に於ける精神美の論が「フェドロス」に於ける身體美の論に對して果して如何なる關係に立つと解釋すべきであるかの問題は、要之、身體美の概念と「美のイデア」の特殊性としての可視性の概念とがプラトニーに依りて最後まで嚴密に——換言すれば美の正當なる規定原理として——確保せられてゐたと見るべきか否かの問題である。而して「シムポシオン」が美の論に於て「フェドロス」と全然矛盾するものであると見る者は「フェドロス」に於ける身體美と「美のイデア」の可視性を以て純粹に美學的なる見地に立つものであるとし、之に反して「シムポシオン」に於ける精神美優位論を以て美を評價するのに善の標準に據るものであると考へる。（此第一の點は吾々の同意する所である。此第二の點は吾々の同意し得ない所である——）。プラトニーは美の特殊性を遂に確立することが出来なかつたと云ふのは、此見方の結論でなければならぬ。併しながら此容易にして明白なる如き結論に急ぐ前に、吾々には尙考慮すべき幾多の事柄が残されてゐる。「フェドロス」に於

ける美の特殊性の規定はプラトニーに取りてさう無造作に放棄せられ得る如き當座の思ひ付きなのであつたであらうか。「フェドロス」に於ても已に『内的美』が語られてゐると云ふ事實は果してさう一概に「フェドロス」と「シムボシオン」の間の矛盾を斷定せしめることを吾々に許すであらうか。よし假りに「シムボシオン」は美を論ずるのに善の立場からするものであることが明らかであるにしても、美としての善たる精神美の問題が其所には残される。善が如何にして美として、精神美として考へられるのであらうかの問題が残るであらう。さうして其所には善と美との關係に就てのあらゆる問題が附隨し來るであらう。吾々の見る所に依れば「シムボシオン」に於て取扱はれてゐる而して「シムボシオン」に依りて吾々に向つて提出せられてゐる所の問題は、第一には精神美と身體美との區別及び其關係であり、第二には善が如何にして（精神美として）美として考へられ得るかであり、さうして第三には善と美との區別及び其關係及び兩者の間に於ける優位の問題である。吾々に依りて斯く明瞭に分類され得る所の三つの問題がプラトニーに依りて形式上判然と區別せられては居らぬ所からして、所謂『矛盾』が指摘され得る如くに思はれるのであらう。吾々は併し寧ろ身體美と精神美との區別が彼に依りて確立——それは單に此分類法が歴史的

に云つて彼を學術的權輿とすると云ふ丈ではあるが——せられたこと、善が美として、若しくは美が善として考へられ得る立場の彼に依りて與へられたこと、さうして美に對しての善の優位が正當に彼に依りて認められたことをプラトールに感謝すべきであらう。「シムボシオン」と「フエドロス」が矛盾するか否かの問題は、さうであるからして、吾々に取りては單なる矛盾の問題ではない。認められると思はれる所の矛盾は單なる指摘を以て結論とすべきではなく、又其等の矛盾と思はれるものゝ故に兩者の孰れが一方を取捨して——プラトール自身に於ける學說の變遷の假定の下に——正説と決定すべきでもなく、實は吾々は先づ是等の『矛盾』を以て——主義の變更に基くよりも——問題の新たな展開に基くものとして解決し得ないであらうかを試みるべきである。「フエドロス」に於て十分に論述せられて居らぬ所の諸問題が「シムボシオン」に於て十分に取扱はれてゐるのだと見るべきではないであらうか。

但し斯く吾々の云ふのは、プラトールの學說に變遷若しくは發展の跡を全然認めないこと云ふことではない。彼の諸對話篇の著作年次が其等の内容の上からは全く識別され得ないこと云ふことではない。(今吾々の考察してゐる「シムボシオン」に就て云へば此對話篇が明らかに劃期的なる、さうして劃期的なることの意味を以て著はさ

れたるものなることは、ハインリヒ・マイアーの十分に證明し得た通りであると私は考へる。H. Maier, Sokrates, S. 137 ff. S. 142-146 参照。吾々の意味する所は、第一に一般的には、美に關してのプラトリーの諸言説は其内容の上から見れば總じて相互に矛盾せるものでないと思へらるると云ふ事である。論述の體裁例へば確定的見解が與へられてゐるとかゝらないとかの上から、或は又取扱つてゐる美の事例と問題との範圍の廣狹等の上から、さうして各對話篇の全體の特徵の上からして、美に關しての重要な言説の見出される諸對話篇を年代に従つて推定的に順序附けることは不可能ではないが、併しさうすることは、プラトリーの美學を理解するためには必ずしも必要でないと思はれる程それは總じてそれ程相互に矛盾せざるものであると云ふことである。第二に特に「プロドロス」と「シムポシオン」の關係に就て特殊的には此兩篇の著作年次は如何に決定せられるにせよ、それが學者に依りて色々に推定せられてゐることは今一々引照して云ふ迄もないことである。其の内容の上にて矛盾として、若しくは少くとも相違として兩者の間に認められると云はれてゐる所のものはいずれも美に關する限りに於ては——學說上の相違若しくは變遷を論斷せしめるには足りないことである。此點を吾々は特にユーリウス・ワルターの見解に對して注

意して置きたいと思ふ。ワルターは兩者の間に矛盾を認めると共に「フェドロス」を以て「シムボシオン」とは全く異なる考へ方の所産とし「フェドロス」を以て遙かに「シムボシオン」に先き立てる著作であるかの如くに見做して居る (Walter, *Geschichte der Aesthetik im Altertum*, S. 297, S. 304-5, S. 288-9, 参照)。ワルターの手引きに従つて此矛盾を檢査した吾々は、併し、『此矛盾』が主義若しくは學說の變更に基くと云ふよりは、寧ろ問題のより廣き展開に基くものとして解釋し得るのではないであらうかと考へるのである。此二篇の著作年次の問題に關しての最近の解答が「フェドロス」を「シムボシオン」に極めて接近せるものと、而かも「フェドロス」が却つて「シムボシオン」に次げるものと見做さうとしてゐることは、吾々の解釋に力を添へてゐる。(マイアー前掲書五五四頁以下其他參照)。吾々は『プラト』の諸書に於てはあらゆる事柄が彼に依りて尋ね問はれてゐるけれども、何事もが確定的に語られてゐない。』と云ふキケロ (Cicero, *Acad.*, I. 46. *Plato in libris nihil affirmatur, et in utranque partem multa disseruntur; de omnibus queritur, nihil certe dicitur.* に興みするものでは云ふ迄もない。少くとも彼の美に關しての諸言說の間に見出されると云ふ所の『矛盾』に就ては、吾々は、其等は所謂プラト一學說變遷史論者 *Entwicklungstheoretiker* の力を借りることをさへも必要とするもの

ではなくして、唯「プラトー」の思想の中心的統一「The Unity of Platon's thought」に依りて解決せられ得るのではないかと考へる。但しヘーゲルが『プラトーを以て満足するな』と云ふ注意を吾々は忘れてはならぬであらう。(Hegel, *Geochichte der Philosophie*, II. S. 178-9. *Es ist besser, sie [platonische Schriften] lassen uns im Ganzen unbefriedigt als wenn wir sie als das Letzte ansehen wollen*)

## 十一

美に關しての「シムボシオン」の所説が「フェドロス」に於ける其と矛盾せりと見做されるのは、身體美に對して精神美がより價値あるより貴ぶべきものであること、否寧ろ身體美は單に精神美のための手段であることが説かれてゐるからである。身體美に對する精神美の此優位は、第一には、身體美を美の代表的中心的地位から蹴落すものである點に於て、さうして第二には、美としての身體美を善としての精神美の手段たらしめ、美を以て善の誕生のための助産婦たらしめる點に於て「フェドロス」の所説と矛盾すると云へる。第一の點に於て其は「フェドロス」に於て確立されてゐる身體美の概念を、第二の點に於て其は同様に「美のイデア」の特殊性としての可視性の概念を、破棄

するものとも云へる。蓋し「フェドロス」に於ては、身體美が其自ら美なるものとして認められてゐるのみならず、美の代表的中心となるものとして確認せられて居る。身體美が斯かる地位を占め得る所以は、其が「美のイデア」の回憶に外ならずして、云はば「美のイデア」の自己顯現だからである。さうして、其が「美のイデア」の回憶であり得るのは、「美のイデア」の特殊性が可視性に存するからなのである。身體美の高調と「美のイデア」の特殊性たる可視性とは離るべからざる關係に置かれてゐる。

之に反して「シムポシオン」に於ては、身體美は美としては、云ふ迄もなくあらゆる他の美と同じく「美のイデア」への分與に依りて美たるには相違ないが、「美のイデア」の回憶若しくは自己顯現そのものではなくして、寧ろ他のあらゆる美に比べて「美のイデア」への分與の最も量少きもの、若しくは「美のイデア」からの距離の最も遠きものとせられる。何故ならば、智慧に富めるディオチマが愛に就て彼に教へた真理として、ソクラテスが此所で語つてゐる所のもものは大要次の如くであるからである（「シムポシオン」二〇—D——二—二A）。——吾々は、殊に「シムポシオン」に於ける言説の敘述に際して、プラトンの詩を吾々の散文に改めなければならぬ所の吾々の役目に惱やまされる。吾々が此「饗宴」からして僅かに其殘肴に似たものゝ而かも極小部分を拾ひ上げて、而

かも又恐らくは屢あ必要な鹽なくして料理しなければならぬことは併し、プラト一の學説に就て語らうとする企圖そのものが吾々の上に課した重い刑罰なのであらう。

(一)愛(希臘的愛) *eros* は「大なる神」であり「美なるもの」愛 *eros tou kalou* であると云はれて居るが、*チオチマ* に従へば彼は決して美しきものでもなく善きものでもなく従つて「大なる神」ではない。彼は美と善とを欲求するものであり、之れを欲求するのは彼自らに之が缺けてゐるからである。美と善とを缺けるものは神と云ふことは出来ない。エロスは寧ろ神と人との中間に在る者、此兩者の間の仲介たる者即ち*ダイモニオン* の一つと見るべきである。ポロスとペニアとの子なるエロスは一面に於ては何ものも己れの意の如くならざるなきことを願つて止まぬと共に、一面に於ては常に缺乏の中に生きるべく運命づけられてゐる。知に於て缺くる所なき神又は已に知を有する者は已に之れに充ち足れるが故に、知を愛し求める *epiagogēn* ことをせず、無知なるものは亦知を缺いてゐるのに自らは足れりとするが故に知を愛し求めることをしない。唯其缺けてゐることを知れる者、唯其充ち足らはんことを求むる者のみが知を愛し求める。エロスは即ち知者と無知者との中間に位する者

である。何となれば「知は最も美なるものであり」而してエロスは「美への愛 *Eros philo-  
to kalon*」である故に、エロスは必然的に知を愛し求める者でなければならぬからであ  
る。(二〇一D—二〇四C)

(二) ところで、エロスが美なるものを愛する時、何を一體彼は美なるものから得やう  
とするのであるか。若しくは、美を愛し求める所の人は何を求めるのであるか。そ  
れは美が彼に與へられる事を求めるのであると答へられる。併し美が與へられる  
時、彼は何を得るのであらう。美を求めるのは果して何のためなのであるか。之に  
對する答は、美の代りに善を置いて考へるならば明瞭となるであらう。即ち人は善  
を所有することに依りて幸福となるのである。さうして幸福とならんとするのは  
何のためであるかと尙其以上に問を進めることは不可能である。答は其所で完結  
するのである。美なるものを愛するのは、さうであるからして、つまりは善を、幸福を、  
求めるのである。之に向つての欲求と愛とは總ての人に常に共通である。吾々が、  
それにも拘はらず、唯或種の人々のみを指して「愛する人」美なるものを愛する人と呼  
ぶのは恰も非有から有を作り出す所の働きは總て詩 *Poetras* と呼ばるべきである  
のに、其等の制作者の中の唯或ものゝみが詩人と呼び做されのと同様である。己れ

の半身とも云ふべきものを求めるのが愛であると普通云はれてゐるが、愛とは己れの半身にせよ全身にせよ、一つの善にあらざるものを求めるものではないと云はなければならぬ。「人間の愛する所のものは善より外の何物でもない」(二〇五E)。「愛とは要するに善を永久に自ら所有せんとすることに外ならない」(二〇六A)。(二〇四D — 二〇六A)。

(三) 愛の仕事は、さうであるからして、唯單に美なるものを求めると云ふ事ではなく、肉體的にも又精神的にも美に於て(美なるものとの交はりに於て美なるものを)生殖し産出することである(二〇六B — 二〇六E)。何故ならば、善を永久に自ら所有せんとすることゝ不死を希ふことゝは一つである、さうして生産は永遠的なるもの、又、不死的なるものであるからである。愛とは、それ故に、不死へ向ふことである(二〇七A、二〇八B)。さうして美とは産褥に侍立する女神モイラとエイレイチユイアとの如きものである(二〇六D)。——プラトンは尙續けて、不死に向つての欲求が萬物の本性であることを述べ、又肉體に於て生産するものよりも精神に於て生産力を有するものがより大なるより美なる知の所有者であることを説いて居る(二〇七A — 二〇九E)。

(四) 以上述べた所のものは、併し、プラトリーがディオチマをして云はしめてゐる言葉に

從へば、愛の秘事に於て尙未だ淺く低いもの、ソクラテスの尙能く理解し得る所のものである。愛の秘密には尙一層奥深い所、即ち、ソクラテスに向つて、爾が理解し得るか否かを私は知らぬ」と云つてデオチマの説ける所のものがある。二一〇A以下の言説は即ち其である。之に據れば、愛に就ての眞の途を知らんとするものが、少年の時に於て先づ美しき身體を追ひ求めることを以て始めなければならぬのは云ふ迄もない。斯くして彼は或唯一人の美しき人を愛するであらう。併し彼は之に次で、或一人の身體に見出さるゝ美が或他の身體に於て見出さるゝ其と兄弟の縁あることを知るに至らなければならぬ。さうして、若し彼がイデアとしての *美* *το εν εἰδει κεινον* を追ひ求むる者であるのならば、彼は遂に總ての身體に於ける *美* *το εν παντι τοις σωματι κεινος* を唯一つの同じものと考へぬことを以て大なる無知とし、従つて唯一人の美しき人を愛することを以て値打なしと知るに至らなければならぬ。之に次で併し又彼は、精神に於ける *美* *το εν ταῖς ψυχαις κεινος* が身體に於ける *美* *το εν τοις σωματι κεινος* よりも遙かに立派なるものであることを知らなければならぬ。斯くして身體の美よりも心の美を愛するに至り、次で制度行動及び法律風俗に於ける *美* *το εν τοις ἐπιτηδεύμασι καὶ τοις νόμοις κεινον* を、さうして之に次で諸の知識に於

